

方向

第九七号 一九八九年五月一日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

やすらひ 忍 一九九・四九 原 田 慶

お昼をすましてから再び今宮神社にいつてみると、午前中に来た時よりもよほど祭らしい雰囲気になっていた。露店もすっかり準備ができ、昼前には液が流れ出してあわてていた店のアイスクリームもかたまって、とんがり帽子のようなコーンのカップにまきあげてもらってなめている人もいる。おもちゃ屋の前では、小さなサイコロを三つ、ばねのようなしかけではね飛ばして、出た目の数の合計で、その数番号のついたおもちゃ、てっぼう、ヘリコプター、こま、シールなどさまざまな品が当たるのを、子どもが次々に買っている。わた菓子、水飴、たこ焼、みんな合わせても十店ほどだろうか。出している方もそれほど期待していないのか、ずつと昔の風景を思い出させるようにひっそりとのんびりと商売をしている。

午前十一時ころに来たときには神社は静かで、子守りの人やお年よりが、あちこちに腰をおろして話しこんでいたりした。絵馬堂の古い額を眺めていると、古い堂内の木の腰掛けに、年とった男のひと二人と女のひとが話している。

男のひとは近くのひとらしくて散歩姿である。やすらい祭というのはどここの祭なのかわからんというようなことを話している。そのうちの一人が、もう十一時半だからといって帰っていった。わたしは、「新聞で見たら、

玄武やすらい、今宮やすらい、川上やすらいの三つあるように書いてありましたけど、その玄武神社とか光念寺とかいうのはどこにあるんですやろ、地図でさがしてもみつからへんのですけど。」とたずねてみたが、二人はまったく知らないようで、「そらきつと、どこぞにあるにきまっています。ないということはおへんで、かならずあります。」といった。女のひとは大正二年生れで七十六歳、ずっとこの近くに住んでいたが、さいきん嵐山のほうに家を買って移ったのだそうである。

「ずっとお針をしましたさかい、若い時に、やすらい祭の鬼の着はる赤い着物を一枚縫うてくれへんかとのまれて、縫わしてもろたことがあります。自分の縫うた着物をきて踊ってくれはるのやし、わたしもそんないっぺん見たいと思てましたけど、所帯がありますやろ、子育てのさいちゅうで暇があらしまへん。そやさかい七十六になるのに、このやすらい祭というもんを見たことがないので。こんど新聞に出てたさかい、いっぺん見せてもらおと思て来たんですけど、三時やいうことですさかい、そんなに長いことよう待てませんし、もう帰ろと思てますんすわ。また来年、もし命があつたら見せてもらいます。」

と、この祭を知らないことを説明してくれた。男のひとは、

「わたしはこのひとより一つ弟ですけど、京都の生れではありません。それでも昭和六年から京都に住んでます。はじめは金關寺のほうに居ましたけど、昭和十二年からこっちにずうつと住んでます。うちの横のガレージの所で、やすらい祭の踊りのひとが集まって出て行かれますので、ここが集合するところにきまつてるのやなどいつも思てます。どこの祭やら、いっぺん誰かにきいてみたいと思てますのや、厄払いにはちがいないのどすけ

ど、今宮さんの祭とはちがいますわな。今宮さんは五月五日神輿さんが出はります。あれが今宮さんの祭です。やすらい祭は今宮さんとは関係おへんで。西陣の織り屋さんのほうの祭ですさかい、鬼の踊りは、西陣のほうをぐるっと廻らりますのや。それでな、お供えをしたらその家の前で踊ってくれはります。細長い紙に（御神酒）とかなんとか書いてありましてな、それを貼るのどす、うちもその紙をもらいました。」

さらに男のひとは教えてくれた。

「三時ごろになったら、あんたもういっぺん来とおみやす。赤い着物の鬼がこの境内で踊らはります。そらかなか派手なもんどすで。うそやおへん、ほんまに三時ごろ来とおみやす。」

そして、おばあさんの肩を引き寄せるようにして、あんたの生れた大正二年と書いた石があるさかい見に行こうとって立ち上がった。おばあさんは「なんやそんな石があるそうですさかい見せてもろてきますわ。ほなさいなら。」とって、二人で本殿のほうへ歩いていった。

桜はほとんど散って、若葉が緑をひろげるなかに、ほんのすこしのこった花が、ほのかな白をちらちらさせている。わたしは絵馬堂の横の石段を上がって、月読社と地主社をおがんだ。それから本殿と疫神社から若宮社へと順におがんでいるあいだに、二人の老人が仲よく並んで歩いてゆくのが見えた。二人は初めて出会ったらしいが、話しているうちに、知らないで、近所に長く住んでいたことがわかり、互いのことなども知ってなつかしくて仕方がないのだということだった。そのあと、わたしも家に帰って、午後になってから出直して来たのである。

本殿のほうへ行ってみると、網で囲んだ白砂の空間を前にして、たくさんの人が集まっていた。本殿と拝殿のあいだには長方形に、拝殿と社務所、参集所の建っているあいだの庭は二十メートルには少し足りないくらいの四角に綱が張りめぐらされて、中へ人が入らないようにしてあった。その四辺に沿って人がずらっと腰をおろしたり立ったりして垣根をつくっている。みんな妙に静かで、テーブルを囲んでなにか出てくるのを待っているように、なにもない地面をみつめている。このなかで鬼のやさしい踊りがあるらしい。それにしてもどこからはいつてくるのか、どこも人がつまっている。なかの白砂に陽が反射してまぶしい。その四角い地面を前にしてほとんどの人が無言だが、ときどき、二歳くらいの子どもが親の手をふりほどいて、ひよこひよここと歩いて出る。親はあわてて子どもをつかまえてもどる。しばらくするとまた出てくる。三、四度もすると、「これこれ、おまえはおめさんやなあ。」などといっている。みんな黙ったままそれを見ている。わたしも拝殿のしたの床のふちに腰をおろしていたが、左のほうに二組の外国人夫婦がいて、一組は子どもを二人連れていて、他の一組は子どもはなく、揃いのえび茶のコートを着た中年の夫婦で女性は日本人だった。みんな低い声で英語で話している。こういう場で見える外国人はたいていずいぶん静かである。

そのうちに人がざわざわしたので見上げると、人垣のうしろに花傘が見えた。大きな傘のまわりに赤い布をたらし、深くかこんで、頂上には花が挿してある。町をまわってきたのですこし萎れているが、柳、山吹、松、桜などが見える。神社の説明書によれば、花傘はやすらい祭のシンボルで「風流傘」「傘鉾」ともいわれ、むかしは絨藁笠（あやいがさ）の上に雉の尾の羽根を飾った笠で、一人一人がかぶっていたといわれるが、現在ののは、

約二メートルくらいの大傘に緋の帽額（もっこう）をかけた錦蓋の上に桜、椿、山吹、柳、若松を挿したもので、この中にはいると厄をのがれるというので、人々は競って花傘の中にはいるのが習わしである、と書かれている。しばらく傘だけが見えていたが、太鼓や鉦、笛の音がして、赤い着物の鬼や紺の直垂のようなのを着た人たちが進んできて、拝殿の周囲を五回ほどまわり、本殿の前で踊っているらしい音がしている。わたしたちのいるほうでは、今にもこちらへきてくれると思つてみんな動かずに待っている。しばらくすると、やっと一つの角の人垣を押し分けて鬼の行列が入ってきた。鬼は四人、黒いシャグマ（長い髪のようなもの）をかぶつて白い鉢巻きをし、鉦と太鼓を打つて笛に合わせ、あちらこちらへ飛び跳ねながら踊る。白い着物に白い袴、背に金糸で文字のような形が大きく縫いとりしてある緋の大袖を、上からはおるように着流しにして、飛び跳ねるから、そのたびに白の上にかさねた赤がふわっと大きくゆれる。その人たちの踊りはどうも参集所のほうに向かっているようで、わたしのいるほうは背中が多かったので、あとの一組は前から見ようと思つて、参集所の建物のほうへまわつて行つた。なるほど、そちらには祭をしている人たちがいるようだった。

「昼からずうつとまわつて来よつたんやさかい、もうあご出しとるとちやうか。」

「ああ、あこのぼんが出とるな。」

「うん、弟も出とる。兄弟で出とるやろ。」

「背中まで汗がしみ出てべつたりやな。」

「今日は暑いさかいな。」

「ここがすんだらもう終わりやろ。」

「いいや、うちのほうは廻つとらへんさかい、これからまだまわりよるんや。」

「そうか、大変やな。」

祭を出している町の人たちは、鬼の青年の話をしているらしかった。今度の鬼は、衣裳は同じだが、黒いシャグマをかぶったのが二人、鉦を持ち、赤いシャグマをかぶったのが二人、太鼓を持っている。小鬼が二人いて、赤いシャグマに烏帽子をかぶり、きれいに化粧をしてもらって、緋の小袖に花のもよりの白袴をはいた、小学校の一年生くらいの子どもで、介添役の人に押されるようにして出てきた。疲れているのだろう、ねむたそうにしている。それでも笛に合わせて、胸につけた羯鼓（かんこ）という小鼓を二人がびよんと入れ代って打つ、これだけがかわいらしい。続いて大鬼が、こんどは輪になって笛に合わせ、右に左に大きく回転して飛び、頭を振り、緋の大袖をゆらゆらさせて、鉦と太鼓をたたいて激しく踊る。汗が流れている。踊りそのものは十分ほどだろうか、あつという間にすんだような感じがした。

黒いシャグマの鬼だけが社務所の前で踊っている間に、小鬼は参集所が上がって一休み、そうりをはきなおさせてもらってまた出発である。袴を着て、扇子や刀をもった人が、歌をうたい、いちばん後にいる人が囃しをいって、「ヨーオ ホイ」と最後に掛声をいれる。三人ほどで立っていた外国人の男性が、同じような声を出して「ヨーオ ホイ」といった。掛声の人が近くまで来たときに、外国の人は、「何を言ってますか。」とたずねた。掛声の人は少し考えてから「はやし、おはやし、ヨーオ ホイ」と相手の顔を見てうなづきながらいった。それ

から前の人の歌に合わせて、体で調子を取りながら、「やすらい花やあ、ヨーオ ホイ」と言った。たずねた人は黙って見つめていた。三回ほど繰り返して、教えるような調子で言ったが、行列が進み出すと、行ってしまった。外国人は、いっしょにいた人を振り返って「むつかしい」とひとこと、日本語でいった。

「やすらい花や」というのは「疫神の鎮まりとどまる花よ」と花傘を讃嘆する囃し詞だという。やすらい祭は、「鎮花祭」と「御霊会」が結びついたものであり、民衆の中から生れた花祭であるといわれている。昔、疫病というのは、春の花のところに、疫神や御霊が飛散して、病を与えたり、人を悩ましたりするものだと考えられていたので、これを鎮めるために営まれていたのが「鎮花祭」である。「御霊会」は、疫病をおこす御霊や死霊を歌や躍りで鎮魂しようとするもので、風水害などで疫病がはやったときにおこなわれたものようである。

鳥辺野葬場にあった祇園御霊社では天禄元年(九七〇)ごろに、船岡山葬場の紫野御霊社では延暦五年(九八七)に初めて御霊会が行なわれたという記録がある。昔は、祇園社は御霊の依り代である銚を鴨川に、紫野は花傘を難波の海へ流したのだという。長保三年(二〇〇)に今宮神社ができて、それからは紫野御霊会は今宮さんで行なわれるようになっていた。

神社の説明書の中に、

かつては「やすらい祭」の「練り衆」が上賀茂、西賀茂、上野、雲林院などが出揃って当社に詣で、華やかさ賑やかさもひとしおであったが、いまは分散し、上野町のほかは夫々の町で行なわれ、その地から当社を遥拝し、代表者が詣でて御幣を奉納するだけとなっているのは寂しい。

と書かれている。わたしが見たやすらい踊りは上野町のものだけだったことになる。今宮神社まで来ない鬼たちは、それぞれの町で踊っているようである。それで、午前中に出会ったおじいさんが、これはどこの祭かわからないといったのだろう。

「今宮さんとは関係おへんで」については、初めての御霊会はとにかく、長保三年の疫病流行に、御霊社を岡山から現在の今宮神社の地に遷し、御霊会を営むようになったということであるから、関係ないとはいえない。ただ御霊会がいとなまれるようになる以前から、民衆の間にこのような祭が行なわれていたということや、現在、上賀茂、西賀茂、雲林院のやすらい踊りが今宮神社まで来ないというのは、どうしてだろうか。また、応仁の乱や戦国時代などには祭もとだえていただろうから、どのようなにして「やすらい祭」が今まで続けられてきたのかということも不思議な気がする。

やすらい踊りがすんで、今宮神社に集まっていた人たちは、なんとなく名残おしげに境内にあるたくさんの末社なども巡りあるきながら、だんだん帰っていく。本殿のなかをのぞいてみると、神官らしい人が急いで後かたづけをしている。

本社はオオナムチノミコト（大黒）、コトシロヌシノミコト（えびす）、クシナダヒメノミコトを祀り、福德寿命、縁結び、商売繁盛、家内安泰を祈願する神様である。疫神社は船岡山から移された御霊社で、摂社としてスサノオノミコトをまつ。これは悪疫病災を除き、罪穢を祓い清め、体力を増進し、勇武を励ます健康の神だという。今日の「やすらい祭」はこの神にお願いするもので、花の精にあおられて陽気の中で飛散するという悪

魔の精霊を、囃子や歌舞によって追い立てて花をあざむく風流傘に宿らせ、紫野の社に送り込み神威を仰いで降伏させるのが、その行法であると、神社の説明にある。

やすらい踊りは、今宮さんに来てから、また、町へ出ていった。全部まわり終わってから、もう一度疫神社に御霊を集め鎮めた依り代を納めに来るのだろうか。そうしないと、せっかく鎮めた悪霊が、また飛んでいってしまう。

今宮神社には寂蓮法師筆の「やすらい唱歌」の掛軸がある。

はなやききたるや

やすらひ花や

や とみくきのはなや

やすらひ花や

や とみをせはなまへ

やすらひ花や

や とみをせはみくらの山に やすらひ花や

やあ まかまでなまへ

やすらひ花や

とまだずっと続く。わけのわからない歌だが、このなかで繰り返される「なまへ」というのは「なんまいだんぶつ」の省略で「なんまい」または「なんまえ」という念仏踊りの囃し詞だろうというのが、民俗学の五来重さんの解釈である。

竹内勝太郎『芸術民俗学』に、

「やすらい花は、やすらい花は、借りたる袖を、いばらにかけな、やすらい花は、やすらい花は」と合唱し、

「チヨ一ハ、サイサイ」と囃しながら踊り且つ練り歩く。

と「やすらい祭」のことを書いてある。今宮神社で聞いた「ヨ一オ ホイ」とは違う。盆踊りの「江州音頭」でもうたう人によって違った内容がうたわれるように「やすらい踊り」の歌詞にもいくつかあるのかもしれない。人がまばらになった境内を歩きながら、わたしは、他の三つのやすらい祭をたずねてみようと考えていた。

樓門を出て、大徳寺の傍の広い参道をまっすぐ北大路のほうへ歩いていると、わたしの後ろのほうで、ひとり何か怒りながら歩いてくる人があった。先日でも電車で隣に坐った人がぶつぶつひとりごとを言いながら、新聞紙を細くさいて肘掛けにならべていた。近くのスーパ―では、ひとり問い、ひとり答えながら買物をしているひとをよくみかける。やはり春は御霊の飛散する季節なのだろうか。紫野高校の前まで来ると、門のあたりの桜がさかんに散っていた。

玄

武

神

社

一九九・四・二〇

原

田

慶

やすらい祭がすんで十日ほどたってから、玄武神社が堀川鞍馬口のあたりにあることがわかったので行ってみた。すつきりと洗いたてたように美しい神社である。それもそのはず、由来は古い現在の社殿は昭和三十八年十二月二十二日に完成したものだ。

地名は京都市北区紫野雲林院町、「うんりんいん」だと思っていたが、神社のひとに「うじい」だと教えても

らった。御祭神は惟喬親王である。陽成天皇の元慶年間(八七〇—八八四)に、悲運であった親王の霊をなぐさめ、また都の北の鎮護とこの地の守護の神として、親王の母(紀名虎の娘、静子)かたの子孫と見られる紀茂光が創祀したものであると説明されていた。北面の鎮護神であるところから「玄武神社」といわれたようで、他に「惟喬社」とか、境内の池にたくさん亀がいたので「亀之宮」などと呼ばれたという。絵馬には亀に蛇がまきついた、いわゆる玄武の図柄が描かれている。

社殿に礼拝してから社務所のほうへ行ってみると、やすらい祭の踊りの絵を印刷したものや絵馬があった。それをかうついでに、ちよつとやすらい祭のことをたずねてみると、ずいぶん親切に、たくさんのことを教えてもらうことができた。年代などは「玄武神社略記」という一枚の説明書で補って、話しをまとめてみると、次のようなことになる。

やすらい祭は、雲、龍、華と三つに分かれている。雲は雲林院のやすらい、つまり玄武神社のもの、龍と華は、上賀茂と西賀茂のもので、上野のやすらいはこの三つに属さない。やすらい踊りの鬼が着る大袖の背にこの雲龍華の縫い取りがしてあったが、最近、新しく作った着物の背には玄武の「玄」の縫い取りをしてあるものもある。玄武神社のやすらい祭は、村上天皇の康保二年(九五)に大水害があり、病気が流行したので、翌三年三月七日に鎮花祭(やすらい祭)が勅命によって行なわれたのが初めである。それは大和三輪神社の狭井社の「鎮花祭」にならったものであったという。そのち一条天皇の長保元年に病気が流行したので、ふたたび勅命によって翌二年(二〇〇)にやすらい祭を行ない、以後毎年営まれるようになった。それからずっとこのちの元和二年(二六六)に雲

林院村の大火によって、一軒残らず火災にかかり、神事ができなくなったので、五か年の契約で、上野村に代行を依頼し、雲林院村の人が四人で、踊りを先導して玄武神社に参拝するようにしていたが、五年たっても雲林院村は復興することができなかった。そのうちに上野村との間もうまくいかず、雲林院村の神事は余儀なく中断されてしまった。明治十五年（一八八三）になってやっと雲林院村でも祭具を新調して、やすらい踊りを行なうことができるようになったのだという。玄武神社で鎮花祭がはじまったことは、康保三年に、紀茂秋という人が書いた式札の記録があり、その時には、御所からも、神具五種、立花五種、白布十疋、玄米五十俵などが神社に納められた。この記録も火事に焼けたが、写しは現在も紀家に残っているという。

玄武神社からすれば、今宮神社のほうは御霊会から始まり、こちらはそれより古く鎮花祭から始まっていると考えられるのだろう。戦国時代には今宮神社のほうでもやすらい祭は中断されていたが、元禄七年（一六九四）ごろに徳川綱吉の生母、桂昌院の尽力によって復興されたということである。玄武神社のほうが歴史は古いようだけれど、数字の上で見ると、中断が二百六十六年間あり、今宮神社で復興されてからも、二百年近く玄武神社では行なうことができなかったことになる。その長い年月のあいだに今宮神社のやすらい祭というものが出来上がったといったのかもしれない。現在では、雲林院のやすらい踊りは玄武神社から出てふたたびそこへ帰る。上賀茂のやすらい踊りは五月十五日、「奠祭」の日の午前中に上賀茂神社に入ると聞いた。西賀茂のことは、玄武神社のひともよくわからないらしいが、新聞には大神宮社から出ると書いてあった。

なお玄武神社のひとの話では、雲林院のやすらいは氏子区域が広く、紫野、柏野、風徳の三学区、百二町内あ

るので、踊りも三組に分かれて行なう。朝の九時ごろから出て、昼食に神社へ帰り、午後にもまた出る。小鬼は疲れるので交代するために十六人くらいいる。大鬼も鉦が重くて一日中踊ることはできないので二十五人ほどいるということである。その人たちが一週間前から毎晩神社に集まって練習し、祭の前日は、それぞれの学区で練習するのだそうである。当日が雨だったりすると、衣裳や道具が濡れて大変だが、やすらい祭が晴天だと、その年の京都の祭はすべて晴れるといわれているそうである。

「やすらいというのは、やすらいというて、ぐずぐずするということです。急いで花が散ると虫が出てきて病気がはやるさかい、ぐずぐずして、ゆっくり散るようというので、やすらい花やと言うのやて聞いてます。それに、稲の花が早う散りすぎんように、豊作を祈願する意味もあるそうです。」

ともいわれたが、あとで調べてみると、折口信夫の説に「やすらへ花や」と命令形にとって「ゆっくりしろ」「花よ、せわしなく散るな」の意にとる解釈があつて、これが広まったのだという。しかしこの説はまちがいであると五来重さんは指摘している。その理由は、古い文献にはどれも、「やすらい花」であつて「やすらへ」という形はないこと。また『大宝律令』の「神祇令」に、

謂く、大神、狹井の二祭なり。春の花飛散するの時に在りて、疫神分散して禳を行う。其の鎮遏のために、必ず此の祭あり。故に鎮花という。

と述べられていて、疫癘を鎮めるためにする御霊会であることがはっきりしている。この祭は春のものなので、ちようど桜の散る季節であり、花が散るように疫神が分散するから、散らない花、松や、しきびや、造花に疫神

を鎮ませ、川に流したり、疫神社にまつり籠めてしまったりするのだというのである。「やすらい花」は御霊疫神の、「やすらひ」の花のことで、「鎮花」も「しづめの花」であって、花を鎮めるのではないのだと言っておられる。玄武神社では、この「やすらひ」の花傘が踊りに出るのが三つと、神社に立っている花傘と、合わせて四つあるとのことだった。

うたっている歌についてもたずねてみたが、もとはちゃんときまった歌詞があるのだが、聞いてみると、それぞれ違うことをいっている、すこしずつ変えて、自分で言い易いようにいっているようだということで、はっきりしなかった。

昨年の夏には、祇園祭の綾傘鉾と四条傘鉾の棒振りや踊りを見た。今年二月の節分には六波羅蜜寺の念仏踊りを見た。どれも念仏鉦と笛と太鼓に合わせて踊る。衣裳などは美しくなりすぎているかもしれないが、祇園祭では型通り無心に踊るように見えるし、六波羅蜜寺では、堂内で読経している僧のまわりを踊りあるくから、その鉦や太鼓の響きには圧倒される。やすらい祭では、着物の背中にびっしょり汗をにじませて踊っていたのは、暑かったばかりではないだろう。鉦を叩き、太鼓や笛の音に合わせて、幼い子どもはただ無心に、若い人は熱心に踊る。まわりで見つめている人々の気持を一身に受けて踊っている。ほんとうは、まわりに集まった人もみんな踊る人に心を託して、一緒に祈るものだと思うのだが、わたしなどは、ただその鉦や太鼓の音を喜び、踊りを楽しんで眺めているだけなのである。今年の夏は岡崎のグラウンドで、盆踊りをおどってこようかなと、ふと考えたりするが、棒杭のような踊りでは御霊もよろこんでくれない、やっぱりやめたほうがいいようだ。

玄武神社のひとにお礼をいって、絵馬を掛けて、堀川通りの広い歩道を自転車で走ったが、川沿いの木々はもう若葉の季節になっていた。

一 乗 があるだけ 一 法華經巡礼 291

1989. 4. 21. 原 田 憲 雄

2.16. 九部のこのわたしの教えは、衆生の力の有無に応じて示したもので、

この方便は、願いかなえる仏の智慧に入らせようと、思ってたが述べたのだ。(49)

ここに、つねに清く、明らかで、汚れなく、素直な仏の子らがいて、

幾千万という多くの仏に供養した、かれらのために広大な經典を、わたしは説く。(50)

このようにかれらは本願を成就して、清らかにうるわしい姿となる。

わたしはかれらに告げるのだ、きみたちは来世には、慈悲の仏となるだろうと。(51)

これを聞き喜びあふれみなはい、われらは仏、世界の主となるだろうと。

さらにわたしはかれらの修行をたしかめて、広大な經典を説きあかす。(52)

この最上の教えをきいた人たちは、導師の弟子で、

ひとつの偈頌でも聞いてたもてば、いっさい成道、うたがない。(53)

一乗があるだけで、第二乗、第三乗は、この世にはけっしてない。

人間の最高のひとが、方便として、種々の乗りものを説くほかは。(54)

仏の智慧を説きあかすため、世界の主は世界に出るが、

なすべきことはただひとつ、第二はない、小乗によって導くことを仏はしない。(55)

自存者がみずから定立するところ、あるべく、あるがままに、覺ったところ、

力、禪定、解脱、根、そこに衆生を安住させる。(56)

わたしにとっては物惜しみの過失となろう、汚れない最勝の覺りの後に、

衆生のうちのひとりでも小乗のうちにとどめておくなら、よくないことで。(57)

物惜しみの心はわたしのどこにもない、嫉妬も、貪欲も、渴愛もない、

すべての邪惡をたちきって、世界のことを覺っているので、わたしは仏だ。(58)

わたしが諸相でかざられて、あらゆる世界を輝かすよう、

幾百という多くの衆生に尊敬され、この法の本性のしるしを説く。(59)

シャーリプトラよ、わたしはこのように考える、どうしたら一切の衆生は、

三十二相のすがたをもち、みずから輝き、世界を知り、自存する者になれるのかと。(60)

わたしが見たよう、考えたよう、わたしが以前に決心したよう、

わたしの誓願は満たされた。仏としての覺りをば、さあ、あきらかに説くとしよう。(61)

けれどもわたしが、シャーリプトラよ、覺りへの意欲を起こせと、衆生にいつても、

無知なすべては迷乱し、わたしの正しく語ったことを、理解しようとは決してすまい。(62)

わたしにはわかつているのだ、かれらがみんな、過去の世にも修業せず、

快樂の糸につながれ、淫欲に渴き、目くらみ、愚かな者らであることが。(63)

淫樂のため危機におちいり、かれらは六道にいためつけられ、

だんだんに墓穴をひろげ、徳なきやからは苦しみなやむ。(64)

つねに邪見の密林に入り、有るとか無いとか、こうだとかこうでないとか、

六十二種の思想によって、虚妄の存在をつかまえて、居すわっている。(65)

汚らわしくって、高慢で、嘘つきで、無頼、ベテン師で、淺学、無知で、

かれらは決してめでたい仏の声を聞かぬ、幾千万億生々世々にも。(66)

かれらにわたしは、シャーリブトラよ、方便でいう、苦を終わらせよ、と。

苦におしつぶされた人らを見ては、涅槃を示してみせもするのだ。(67)

こんなふうにもわたしは説く、これらすべての存在は本来しずかで常に寂滅しているので、

修業を成就するならば、仏の子らは未来世にきつとジナになるだろう、と。(68)

三乗をわたしが説くのは、わたしのいわゆる巧みな方便にほかならず、

乗りものはただ一つ、道理も一つ。一つだ、導師の教えもまた。(69)

取りのぞけ、もしもたれかにこれについての疑いがあり、とやかくの思いがあるならば。

語りなく説くのが世界の導師である。乗りものはこの一つだけ、第二はない。(70)

navāṅgam etan mama śāsanaṃ ca prakāśitam satva balābalena /

upāya eso varadasya jñāne praveśanārthāya nidarśito me // 49//

bhavanti me ceha sadā viśuddhā vyaktā śucī sūrata buddhaputrāḥ /

kr̥tādhikārā bahu-buddha-koṭisu vaipulyasūtrāṇi vadāmi teṣāṃ // 50//

tathā hi te āśaya-sampadāya viśuddha-rūpāya samanvitā 'bhūt /

vadāmi tān buddha bhaviṣyatheti anagate 'dhvāni hitānukampakāḥ // 51//

śrutvā ca prīti-sphūta bhonti sarve buddhā bhaviṣyāma jagat-pradhānāḥ /

punaś ca haṃ jāniya teṣa caryāṃ vaipulyasūtrāṇi prakāśayāmi // 52//

ime ca te śrāvaka nāyakasya ye hi śrutam śāsanaṃ etaṃ agryaṃ /

ekāpi gāthā śruta⁴dhāritā vā sarveṣa bodhīya na saṃśayo 'sti // 53//

ekaṃ hi yānaṃ dvitīyaṃ na vidyate tṛtīyaṃ hi naivāsti kadāci loka /

anyatr upāyā puruṣottamānāṃ yad yāna-nānātv upadarśayanti // 54//

baudhdhasya jñānasya prakāśanārthaṃ loka samutpadyati lokanāthah /

ekaṃ hi kāryaṃ dvitīyaṃ na vidyate na hīnayānena nayanti buddhāḥ // 55//

pratiśthito yatra svayaṃ svayambhūr yac caiva buddhaṃ yatha yādṛśaṃ ca /

balās ca ye dhyāna-vimokṣa indriyās tatraiva sattvā pi pratiṣṭhāpeti || 56||
 mātsarya-doṣo hi bhaveta mahyaṃ spṛṣitva bodhiṃ virajāṃ viśiṣṭāṃ ||
 yadi hīnāyānasmī pratiṣṭhāpeyaṃ ekaṃ pi satvaṃ na mam etu sādhu || 57||
 mātsarya mahyaṃ na kaḥiṃci vidyate īrṣyā na me nāpi ca cchandaṛāggaḥ /
 uechinnā-pāpā mama sarva-dharmās tenāsmi buddho jagatānubodhāt || 58||
 yathā hy ahaṃ citritu lakṣanehi prabhāsayante imu sarva-lokaṃ /
 puras-kṛtāḥ prāṇi-śatair anekair deśeṃ iṃāṃ dharma-svabhāva-mudrāṃ || 59||
 evaṃ ca cintemy ahu śāripuṭra kathaṃ nu evaṃ bhavi sarva-sattvāḥ /
 dvātriṃśatī-lakṣana-rūpa-dhāriṇaḥ svayaṃprabhā lokavidū svayaṃbhūḥ || 60||
 yathā ca paśyāmi yathā ca cintaye yathā ca saṅkalpa mānāsi pūryaṃ /
 paripūrṇaṃ etat prañidhāna mahyaṃ buddhā ca bodhiṃ ca prakāśayāmi || 61||
 saced ahaṃ śārisutā vadeyaṃ sattvāna bodhāya janetha chandaṃ /
 ajānakāḥ sarva bhrameyur atra na jātu grhṇīyu subhāṣitaṃ me || 62||
 tāṃś caiva haṃ jāniya evarūpān na cīrṇacaryāḥ purimāsu jātiṣu /
 adhyositiṭāḥ kāma-guṇesu saktās tṛṣṇāya saṃmūrechita moha-cittāḥ || 63||
 te kāma-hetoḥ prapātānti durgatāṃ śatsū gatiṣū parikhidyamānāḥ /

katasī ca vardhenti punah punas te dukkhena sampīḍita alpapuṅyāḥ || 64||
 vilagna dr̥ṣṭī-gaḥanesu nityam astīti nāstīti tathāsti nāsti /
 dvāsasti-dr̥ṣṭī-kṛta niścayitvā asanta-bhāvaṃ parigrhya te sthitāḥ || 65||
 duḥśodhakā māni ca daḥbhinās ca vankāḥ śathā alpaprūtās ca bhātāḥ /
 te naiva śṛvanti subuddhaghosaṃ kadāci pi jāti-sahasra-koṭiṣu || 66||
 nesāṃ abhaṃ śārisutā upāyaṃ vadāmi dukkhasya karoṭha antam /
 dukkhena sampīḍita dr̥ṣṭva satvān nirvāna tatrāpy upadarśayāmi || 67||
 evam ca bhāṣāmy ahu nitya-nirvṛtā ādi praśāntā imi sarva-dharmāḥ /
 caryāṃ ca yo pūriya buddhaputro anāgate 'dhvāni jino bhaviṣyati || 68||
 upāyakaśālyā mamaivarūpaṃ yat trīni yānāny upadarśayāmi /
 ekaṃ tu yānaṃ hi hayaś ca eka ekā c iyaṃ deśana nāyakānāṃ || 69||
 vyapanehi kāṅksāṃ tatha saṃśayaṃ ca yesāṃ ca keśāṃ ci ha kāṅksa vidyate /
 ananyathā-vādina lokānāyakaḥ ekaṃ idaṃ yāna dvitīya nāsti || 70||

「九部の教え」とは、前回の(45)に「経」から「論議」まで羅列された九つを指し「九分教」ともい、
 釈尊の教えを聖語としてまとめた九種の分類である。念のためもういちどかかげ()内に妙本の訳語をします。
 經(脩多羅)、偈頌(伽陀)、本事譚(本事)、本生譚(本生)、奇瑞譚(未曾有)、因緣譚(因緣)、譬喻(譬喻)、

重頌（祇夜）、論議（優婆提舍經）。この順序は『法華經』特有のもの。一般には次の通り。契經、重頌、授記、偈頌、感興語、如是、本生譚、未曾有法、方広。なお、この九つに因縁、譬喩、論議の三つを加えたものを十二分教、または十二部教という。十二分教と『法華經』の九部教とのかかわりにつき、前田尊学氏は『原始仏教聖典の成立史研究』で次のようにいう。

『法華經』諸本に見られる九分教は、実は真の意味での九分教ではない。十二分教を知った上での九分教と思われる。『法華經』類は十二分教のうち、*vyākaraṇa*, *udāna*, *vaipulya*の三分をもって自經に当て、残りの九支をもって「九部法」と称したのであろう。従って自經の構成要素とならなかつた九部法は、やがて『法華經』の立場からは低く見られる結果となつた。『法華經』の九部教説が、（小乗九部大乘十二分説）の起源であるとせられるゆえんである。ところで『法華經』の作者が、十二分教の中から任意に三分を抽出し、特別扱ひしたとしても、わざわざ九分教の形式を保持しているのは、やはり九分教の權威を承認しているからであらう。学者はこの点に関し、「一は復古精神に基いて、古き九分教と言う型に則り、他は法華經の特殊の地位を確保する為め、内容的に九分教、十二部經の各支分を検討して、以て必要なる九部を撰び出したものであろう」と主張している。

ここで十二分教の一つについて簡単に説明しておこう。（ ）内の、まえばパーリ、あとはサンスクリット、
両語同型の場合は繰り返さない。

修多羅、契經 (*sūtra*, *sūtra*) 釈尊の教えの要点を散文でまとめたもの。広義のばあいはすべての經典をさす。

祇夜、重頌 (geyya, geyya) 前に散文で述べたところを重ねて韻文で示した部分。

授記、記別 (veyyakarana, vyakarana) 仏弟子などの未来についての証言部分。

伽陀、偈頌、孤起偈 (gāthā) たちに韻文で記された教説。広義のばあいは詩一般を指し、重頌を含む。

優陀那、感興語、自説 (udana) 悲喜の感動を仏がみずから述べたことばで多くは韻文。

如是語、本事 (itivuttaka, ityuktaka, itivuttaka) 昔話の形をとった教説。

本生 (jataka) 仏・菩薩の前生物語。本生は現世の出来事に因んで過去を語り、本事は過去に始り過去に終る。方広、方等 (vedalla, vaipulya) 問答体による教義の詳説。のちには小乗に対する大乘を指す。パーリとサン

スクリットは語源を異にするといわれる。

未曾有 (abbutadhamma, abbutadharma) 仏、仏弟子などの希有な功德や奇蹟を説く。

因縁、縁起 (nidana) 戒律や説法の由来を述べる。

譬喩 (avadana) 譬喩的な物語。もとは英雄的な行動の物語をさし、広い意味では、本生、本事をふくむ。

優婆提舍経、論議 (upadesa) 簡単に説かれた仏説を大弟子らが解説し注釈したもの。

以上の説明がそれぞれのつ複雑な内容を尽くしていないのはいうまでもない。必要な向きは前田氏の前掲書を見られるがよい。このような知識は「一大事」を前にすると色あせて感ぜられる。まもなく戦場で死ぬだろうと思うと、ぎりぎりの焦点は何か、といったことにはかり心が走って、一つの言葉、一つ概念を、ゆっくりさぐり、味わい、楽しむことをしなかった。死にぞこなって帰ってきてても、敗戦国で家族をかかえて飢餓を凌ぎな

がらうろつく身には、「一大事」さえ陽炎のようにゆれ、うかうか過ぎ、気がついたら老人になっている。日が暮れて遠い道を、杖の先で確かめたしかめ歩いておかしいが、歩くことのうちに旅があり、巡礼があり、「一大事」といっても、着けばおしまいの目的地ならいざしらず、過去の仏から未来の仏へと限りなく受けつがれる誓願のリレーだとすれば、せいぜいが百年の短い人生の若い時にできなかった作業を、いましてわるいこともあるまい。

(52) 以下の「世界」は、これまで「世間」と訳してきたものである。いまの日本語の「世間」は仏教經典に使われているものにくらべて遙かに矮小になっていることを、この翻訳をすすめているあいだに痛感する。態度が一貫しないが、先のほうが長いので、思い切って変更することにした。

(54) を、妙本は「十方の仏土の中には、唯だ一乗の法のみ有って、二も無く亦た三も無し、仏の方便の説は除く」とし、正本は「仏道は一ありて、未だ曾て二あらず、いかにいわんや一世にして三あるべけんや、人の上のかりに方便を行なうを除く」とし、ほぼ一致する。ここが「方便品」の焦点で『法華経』前半の中心である。学者によっては、『法華経』全体の焦点であり中心だというひともあるくらいである。そのような問題はあるにしても、数字に問題はなさそうだが、それが大きな問題となった。「二」と「三」はわたしの訳でわかるように序数なのだが、妙本も正本も「二」「三」とするので、中国では「二つ」「三つ」と解釈するものと、「第二」「第三」とするものとに分かれ、そこから論争が起こり、宗派がわかれ、日本の仏教にももちこされた。おもしろい問題だが、すでに説きつくされている。

「小乗」とは、劣った乗り物、ということ、声聞のめざす道と、独覺のめざす道とをさす。これを二乗ともいう。大乘教徒から、上座部の保守的な傾向に対して投げた、貶称である。しかし、さげすむことが目的ではなく、その保守性を脱却させるのがねらいなのだ。上座部のなかでも、声聞の保守性は、釈尊の前で弟子たちが己をふりかえったときの、わたしはともあの方の境地には到達しえまい、といった卑小感、無力感から、生れるものであろう。ことに釈尊と同年代の長老弟子たちにとって、残り少ない寿命のうちに、師と同じ大きな目的を果しうるとはとうてい考えられなかったであろう。謙虚な心情から出たものであろうこと、疑いえない。とはいえ、釈尊が、すべてのものが仏になることが如来のこの世界に出現する目的だ、というとき、いやわたしは仏になんぞともなれません、といい返すことは、先生のおっしゃることは嘘です、とても信じられません、ということになろう。その判断がなにを根拠になされているかという、現におのれが仏になっていないではないか、という小さな個人の体験にすぎない。小さな個人の体験は、空虚なものではないにしろ、古今東西をつらぬく真理とはいえない。小さな個人の体験を盾にとって、釈尊の嘘といい、師の言葉を信じえないというのは、謙虚に似て、実は傲慢なのではないか。上座部の保守性は、この傲慢の上に聳えている。さきに座を立った五千人は、その疑問を師にただすことさえしなかった。思ひ上がりとしかしいようがない。

上座部には、比丘の二百五十戒、比丘尼の五百戒などがあるが、初期の大乘教団には、特別の戒律はなかった。『法華経』は、この傲慢、思ひ上がりを、みずからの戒律の根本とし、それを五千人の退席という事件で暗示し、信じることの大切さを明らかにしたのだ、とする意見が、布施浩岳氏から出されている。傾聴すべきであろう。